原著論文

岩版・土版の身体表現について
—土偶との関わりから—

斎藤和子
東京大学大学院理学系研究科人類学教室

論文要旨 岩版・土版はこれまで、石製または土製という材質の違いはあっても同一形式に属し、連続的な変化を遂げ、6型式に分類されるとされてきた。そして、初現形態である第1類を見ると、土偶と何ら形態的な関係がないと考えられ、ゆえに、岩版・土版は土偶と形態的に無関係であるとされてきた。しかし本研究の解析の結果、1) 岩版・土版は同一形式に属するとしても、連続的に変化するとはいいがたいこと 2) 細別されていた従来の6型式は、3型式に大別されること 3) 第2類・第3類の岩版・土版は、土偶の人体意匠の表現様式に影響を受けていること、を指摘した。

キーワード 岩版・土版, 土偶, 正中線, 身体表現, 表裏, 亀ヶ岡文化, 細別と大別

The study of the representation of the human body in tablets and parallels with clay figurines

KAZUKO SAITO
Department of Anthropology,
University of Tokyo

Abstract The tablets discussed in this article are widely believed to have been associated with ritual activity of the Kamegaoka culture, based in the Northern Tohoku district during the Final Jomon period.

To date it has been asserted that a) the design of the tablets changed progressively throughout the period, b) they can be classified into 6 types and c) the form nor the design of the first type in no way resembles that of clay figurines and there is no relation between the two.

I wish to contest these findings in my study. Firstly I suggest that tables did not continuously change in design. Although the first type had no apparent similarities with clay figurines, this does not imply that the subsequent types did not bear such resemblance. We cannot assume that the significance of the tablets remained constant throughout the period, from the first of the six types to the last. I believe that interpretations made regarding the changes observed in tablets have been insufficient in their depth. Secondly, the six types already identified can be further classified into three types. Lastly, the second and third types are related to clay figurines in that both of them feature representation of the human body.

1. はじめに

岩版・土版は、遮光器土偶や石棒と並んで縄文時代晩期の亀ヶ岡文化に特徴的な遺物であり、東北と関東の二つの地域を中心として分布する。まず最初に東北北部において岩版を中心として発達し、関東では東北の影響を受けつつ土版を中心に発達した。通常は、両面に文様を施された楕円形または長方形の板状の遺物であり、半孔や貫通孔を持ったものも多い。

岩版・土版の研究史は、E.S. モースが、大森貝塚で板状の土製品を発見、タブレット (Tablet) と命名したことに始まる (1879)。この Tablet は最終的に土版と訳された。やや遅れて、佐藤傳藏が亀ヶ岡遺跡より板状石製品を発見、土版に倣い岩版と命名した (1896)。当初岩盤と書かれているが、のちに岩版に統一表記される。

関東地方の土版に人面や四肢が付いているものが見られること、また、東北地方の岩版に遮光器土偶と共通する眼の表現があるものが見られることから、土偶と岩版・土版との関係は早くから議論の対象となってきた。初期の議論は、岩版・土版と土偶との間に何らかの関係があるという前提に立って論じられたものが多い。主に二つの論旨があり、一つは岩版・土版は土偶から連続して変化したとする説であり、もう一つは岩版・土版は土偶の影響を受けているものの互いに連続しているものではなく、それぞれ異なる目的のために作られた別形式の遺物であるという説である。大野延太郎 (1897, 1898, 1901, 1918)、坪井正五郎 (1899)、佐藤傳藏 (1897) らは、土版や岩版の中に土偶と文様や形態が類似しているものがあることに注目し、土版および岩版は土偶の変化したものであろうと推論した。一方、鳥居龍蔵 (1922) は、土版が土偶と同様人体を模した女神像であるとしながらも、両者の連続性は否定し、土偶＝神像、土版＝携帯護符であるとして、その目的において大いに異なっているとした。また、中谷治宇二郎 (1929, 1930) は、「土偶と土版・石版とは類型

学的関係がある」としながらも、「土偶と土版は形式の相違である」とし、両者は連続するものではなく、根本的に別の遺物であるとした。

しかしながら、これらの議論には根本的な問題点があった。当時は岩版・土版の編年がいまだ確立しておらず、岩版と土版のどちらが先行していたのか、東北と関東はどちらが中心地だったのかといったことも不明なまま、もっぱら土版を中心として土偶との関係が論じられていた点である。資料の絶対数が少なかったことも加わり、型式分類の試みも不十分であった。

時代が下り資料数が増加してくると、これらの問題点を意識した議論が行われるようになった。池上啓介 (1933) は、岩版・土版を楕円形、長方形、人面付の三型式づつに分類し、型式ごとに土偶との関連の有無を論じるべきであるとの見方を示した。また、彼が東北地方の岩版に対して土版が関東地方に多いことを指摘したことも重要である。芹沢長介 (1960) は、この池上啓介の見解を更に広げて、地域的・時間的順序をより明確にした。彼は、岩版はもと土偶とは無関係に亀ヶ岡文化の中心地において発生し、関東地方では岩版を模した土版がつくられたと述べた上で、人面付土版は一般的なものではないとした。野口義麿 (1964) は、人面付土器等様々な土製品が制作された時期が晩期初頭に顕著であると指摘した上で、顔面意匠を持つ土版もこうした時期の一つの流行の型ではなかったろうかと述べ、人面意匠をもって岩版・土版と土偶とを関連付けるのは不適當であるとの見方を支持した。

これらの流れをふまえ、天羽利夫は 1965 年、亀ヶ岡文化における岩版・土版の画期的な型式分類を行い、岩版・土版と土偶との形態的な関係を否定した。天羽の研究とは、文様を基準とし、岩版・土版を東北地方は第 1 類 (大洞 B 期)～第 6 類 (同 A' 期) の 6 型式に、関東地方は A 類と B 類の 2 型式に編年・分類して、土偶との関連を見たものである。その結果、関東地方の人面付土版は周辺的なものであることを

指摘した上で、東北地方の岩版・土版について次のように考察した。

1. 初現形態である第1類は形態的に何も土偶との類似を持たない
2. 人面付きのものは第2類になってあらわれる
3. その人面付きのものは例外として取り扱わなければいけない(もっとも多い第2類においても、総数42個のうち10個=23.8%にすぎない)

以上のことから、土版・岩版は直接土偶とは形態的になんら関係なく発生したという結論を得た。その後、小林達雄(1967)、稲野彰子(1983b, 1990)がそれに続く同意見の論文を発表し、現在では、岩版・土版と土偶との間に形態的な関係はないとする見方が主流となっている。

2. 問題点と本研究の目的

天羽らは土偶と岩土版を「形態的に」無関係としているが、その根拠としているのは、おもに人面表現の有無である。その人面表現とは、基本的に眼や口など沈線で描かれたものであり、形状ではない。本来形態という語は形状としての意味が強い。ここでは論旨から言って、「形態的に」無関係という言葉は「身体表現としては」無関係という意味に置き換えられるだろう。

ここで、文様、形態という概念を整理する。文様は表面に描かれたり彫り込まれたりするもの、形態は頭・手足などの形状である。この文様と形態の総合体の一つの形式を作るといえる。岩版・土版における人面表現は、描かれたり彫り込まれたりするものなので、その意味では広義の文様である。しかし、ある文様が、単に装飾的なものなのかそれとも身体を表現しているものなのか、それは大きな違いであり、明確に区別されるべきである。前者はS字文・山字文・入組文等、装飾的な文様で、文様要素ともいわれているものであり、後者は眼表現・口表現等、平面のレベルで身体を直接表現しているものである。天羽が型式分類に使用している

のは前者すなわち文様要素であり、土偶との形態的無関係の根拠としているのは、後者すなわち身体的表現の有無である。よって結局「岩版・土版と土偶との関係」に関する議論は、岩版・土版が身体的表現を持つか持たないか、という点に絞られる。

ところで、身体的な表現は、顔面表現には限らない。例えば、土偶における正中線は、腹部を示す身体的な表現であるといえる。第2類の岩版・土版にはじまる片面長軸方向の正中線は、いままでは単に装飾的な文様として捉えられてきた。しかしそれらは本来胴体を示す身体的な表現で、土偶の正中線にあたるものだったのではないかというのが、筆者の主張である。もしそうであれば、土偶との関連は否定できない。これまで岩版・土版が土偶との関係において論じられるとき、おもに重要視されてきたのは人面表現の有無であった。また、裏面との意識的な比較もほとんどなされてこなかったか、なされたとしても甚だ不十分なものであった。しかし、土偶は顔だけでできているわけでも、正面だけでできているわけでもない。顔面表現がなくとも、胴体という視点から見れば、亀ヶ岡文化の一時期、岩版・土版と土偶には、数多くの共通項が見られるように思われる。初現形態をもって全体を論じるまえに、岩版・土版が連続的に変遷するか否かを確認する必要がある。岩版・土版は、ある時期は土偶と関連があったかもしれないし、ある時期はなかったかもしれない。文様(およびその配置)の変遷をみると、時代ごとに制作意図が違った可能性が十分考えられるのである。第1類の岩版は、東北地方北部の11遺跡から出土する20点にすぎない。うち全体の形状が確認できるものは6点のみである。これに対し、第2類の岩版・土版では、青森・秋田・岩手の東北3県だけでも41遺跡・101点で、うち全体の形状が確認できるものは50点である(図3)。この時期に岩版・土版は、出土数・分布ともに飛躍的に拡大する。そして、第2類・第3類が比定されている大洞

BC期・大洞C1期とは、遮光器土偶や石棒、岩偶といったさまざまな遺物が多数出現し、発達する時期である。

本研究においては、以上のようなこれまでの経緯を踏まえ、おもに第2類と第3類の岩版・土版の文様に注目し、裏表の概念から土偶との関連性を論じる。そのうえで、岩土版を連続的なものとして捉えることを考え直し、総合的な質の違いに基づいて大別することを提案する。本論文で明らかにしたいのは岩版・土版が連続的に変化するか否か、土偶の身体表現に影響を受けているか否か、基本的にこの2点である。

なお、本論文における対象は、青森・岩手・秋田東北地方北部三県の縄文晩期亀ヶ岡文化期の岩版・土版に限るものである。

3. 対象および方法

3-1 岩版・土版について

天羽(1965)は東北地方の土版・岩版を6種類に、関東地方の土版・岩版を2種類に型式分類している。これまでこの天羽の型式分類による編年がもっとも妥当なものとして使用されており(永峯光一, 1977; 稲野彰子, 1983; 村越潔, 1983), 筆者が各報告書で共伴土器を確認したと

表 1

<岩版・土版分類シート>

No.	ID	遺跡	報告書	19 年	埋文・教委
河川域	1:岩木川 2:陸奥湾沿岸 3:馬淵川 4:北上川 5:米代川 6:雄物川				
分類	1: 1類(大洞B) 2: 2類(大洞BC) 3: 3類(大洞C1) 4: 4類(大洞C2) 5: 5類(大洞A) 6: 6類(大洞A'または砂沢)				
材質	1: 石製品(泥岩もしくは凝灰岩) 2: 土製品				
技法	1: 浮彫 2: 浮彫+線刻 3: 線刻 4: 線刻+刺突紋 5: 線刻+刺突紋+縄文				
破損状態	1: (ほぼ)完形 2: 破損品だが全体が推測可能 3: 破片だが裏表確認可能 4: 破片				
長さ×幅×厚さ()×()×()cm					
形	1: 隅丸方形 2: 楕円形 3: 隅丸台形 4: たまご形 5: 円形 6: 内湾 7: その他				
眼状表現 : 0 1 2 3 口状表現 : 0 1 2 表正中線 : 0 1 へそ半孔 : 0 1 裏正中線 : 0 1					
側溝	0: 無 1: 沈線による側溝 3: 刺突線による側溝				
対弧文	0: 無 1: 有				
両面差違					
	両面とも文様なし-0				
	両面とも一様-1				
	片面のみに正中線	長軸方向	裏面入組文	横位-2 縦位-3	
			裏面その他	横位-4 縦位-5	
			裏面文様なし-7	一様-6	
		短軸方向	裏面入組文	横位-8 縦位-9	
			裏面その他	横位-10 縦位-11	
			裏面文様なし-13	一様-12	
	片面のみ線のない線対称	長軸方向	裏面入組文	横位-14 縦位-15	
			裏面その他	横位-16 縦位-17	
			裏面文様なし-19	一様-18	
		短軸方向	裏面入組文	横位-20 縦位-21	
			裏面その他	横位-22 縦位-23	
			裏面文様なし-25	一様-24	
	両面とも正中線	長軸方向-26			
		短軸方向-27			
	両面とも線のない線対称	長軸方向-28			片面無文、片面一様-30
		短軸方向-29

図1 本論文で対象とした河川域・地図

ころでも、これと大きく矛盾する例は見出せない。よって、ここでもそれに従って考えることにする。

対象について述べる。青森・岩手・秋田の東北地方北部3県70遺跡の岩版・土版計266点である。そのうち実見資料は181点、文献資料は85点である。収蔵場所または文献資料の出典については、付記リストにまとめて示した。文献資料の大半は図版または写真によるものであるが、『原始文様集』(杉山寿栄男 1923),『日本原始工芸』(杉山寿栄男 1928),『土版岩版発見地名』『史前学雑誌』8-5 (池上啓輔 1935) は拓本資料を含む。

分類方法について述べる。分類項目は、河川域、型式、材質、技法、破損状態、最大長、最大幅、厚さ、形、眼状表現の有無、上端中央の

半孔(口的表現)の有無、下端中央の半孔(へそ半孔)の有無、片面の中央分割線の有無、その裏面の中央分割線の有無、側溝の有無、中央分割線に沿った対弧文の有無、両面の差違である。これら筆者が設定した17の分類項目に基づいて一点ごとにデータシート(表1)を作成し、その集計結果による数字をもとに、全体的な傾向と型式別(類別)の傾向をみた。

「眼状表現の有無」以降の項目について説明する。

眼状表現の有無

0: 無し, 1: 遮光器状の眼表現およびそれから中央の沈線が消えたもの, 2: 2本の沈線によって表現されているもの, 3: 両端に左右対称な2つの貫通孔があるもの

ただし、後述するように3(両端に左右対称な2つの貫通孔があるもの)は機能的に異なる意味が付加されている可能性も高いので、実際に眼表現として考察するときには除いた。

上端中央の半孔(口状表現)の有無

0: 無し, 1: 有り, 2: 貫通孔

上記眼状表現がある場合は通常それに挟まれているので、口状表現とした。上記眼状表現と同じ理由により、2(貫通孔)は、実際に口表現として考察するときには除いた。

表側における正中線の有無と、裏側における正中線の有無

0: 有り, 1: 無し

表裏の基準は、上端中央の半孔(口表現)の有無である。半孔がある場合はそちらを表とし、そうでない方を裏面とした。半孔がない場合は、片面にだけ正中線が入っていたらそちらを表とした。

半孔もなく、両面の差違が見られない場合は、特に表裏の区別はできないとした。

正中線下線の半孔(へそ半孔)の有無

0: 無し, 1: 有り

正中線の下端を、上端と同じように半孔で留めている場合がある。土偶の正中線では一般的にみられるもので、へそと考えられている。こ

ここではそれに倣い、へそ半孔としておく。

側溝の有無

0: 無し, 1: 沈線による側溝, 2: 刺突文による側溝

晩期も後半になると、側面に沈線または刺突文でぐると溝を入れるものが出始める。これを3種に分類した。

正中線に沿った対弧文の有無

0: 無し, 1: 有り

晩期の前半、正中線に沿って対弧文が沈線で描かれているものが見られる。その有無をみた。両面の差違

表の文様を詳しく述べることは、天羽(1965)によってすでに十分なされており、ここでは扱わない。

今まで取り扱われていなかった、表の正中線の有無と裏の文様との関連をみるのがこの項目の主目的である。後に土偶と比べることを意識し、土偶の胴部の分類にも共通して使えるように設定した。各選択肢について説明する。入れ子構造のようになっているので、段階的に述べる。

第1段階：正中線あるいは線対称性の有無

まず両面の正中線あるいは線対称性の有無によって、両面とも文様無し、両面とも一様、片面が無文で片面が一様、片面のみに正中線あり、片面のみ正中線こそないが線対称、両面とも正中線あり、両面とも正中線はないが線対称、のうちどれであるかをみた。なお、「文様無し」とは、正中線がなく、かつ装飾的文様もない場合である。「一様」とは、正中線がなく、かつ装飾的文様が上下左右の区別なく面全体に施されている場合である。

第2段階：長軸か短軸かの方向性

正中線があるもの、または線対称なものの場合、それが長軸方向であるのか短軸方向であるかをみた。

第3段階：裏面の文様の種類

片面のみ正中線または線対称性があるものの場合、裏面の文様が入組文であるのか、その他の文様であるのか、無文であるのかをみた。な

ぜ特に入組文に注目したかという点、岩土版だけでなく土偶の背中にもよく見られる文様だからである。

第4段階：裏面の文様の方向性

裏面が入組文またはその他の文様である場合、横位であるのか、縦位であるのか、上下左右の区別がなく一様であるのか、その施文の方向性をみた。

このようにしてありうる場合をならべていくと、選択肢は合計31になる。実際に岩版・土版と土偶の両者に存在したのは、そのうちの21の選択肢であった。なお、正中線の有無をみた上で裏面の文様を見ているので、一部、正中線の有無そのものの情報と重複している。統計上の処理をするときは、「正中線の有無」の項目かこの「両面差違」の項目か、場合に応じてどちらか一方だけを取り、重複しないように注意した。

すべての岩版・土版は、以上計17項目について、各選択肢のいずれかに入り、重複して入ることはない。これらの集計結果に基づいて、各類ごとの傾向をみた。ただし本論文では、長さ・幅・厚さの計測値に関する結果・考察は省略した。

3-2 土偶について

対象：青森・岩手・秋田の東北地方北部3県170遺跡で記載された土偶計2670点のうち、胴体部の表裏の正中線の有無が確認できるもの330点、うち表裏の文様まで確認できるもの307点を用い、亀ヶ岡文化期全体を通しての土偶の正中線の有無と、裏表の文様の差違をみた。さらにそのうち、本研究の岩版・土版と同じ基準で比較するためには、編年が可能な遮光器形土偶すなわち遮光器土偶・結髪形土偶・刺突文形土偶計189点を用いた。文献として『東北・北海道の土偶II』（土偶とその情報研究会1996）を引用した。

分類方法

分類項目：河川域、タイプ、表面（腹側）の正中線の有無、裏面（背側）の正中線の有無、両面の差違

以上5つの分類項目に基づいて、一点ごとにデータを取り集計した。

各項目について説明する。河川域、表正中線の有無、裏面の正中線の有無、両面の差違については、岩版・土版と共通である。表裏の区別は腹側を表とし、背側を裏とした。タイプについては、1: 亀ヶ岡文化前半期(大洞 B1 期～大洞 C1 期)の遮光器形土偶、2: 亀ヶ岡文化後半期(大洞 C2 期～大洞 A' 期)の遮光器形土偶、3: その他時期が特定できない中実土偶の3タイプに分類し、集計した。亀ヶ岡文化期全体の土偶の傾向をみるためには1, 2, 3を用いた。岩版・土版との比較には1と2のみを用い、3は用いなかった。岩版・土版は6時期に分類されているので、本来ならば、土偶も同様に6時期に分類し、各々の時期における両者を対比することが望ましい。しかし、両者の時間的変遷がずれたり異なる可能性もあり得ると考えるので、厳密に個々の時期に対応させることは、現時点ではなるべく避きたい。そこで、編年が確立されている遮光器形土偶のみをとりあげ、大きく前半・後半の2時期にわけて分類した。晩期の土偶は、大洞 B2 期に遮光器土偶が成立し、大洞 BC 期、C1 期に最盛期を迎えるが、その後大洞 C2 期にそれまでの型式特徴を大きく転換し、無文化に転じる(磯前, 1994)。以上のことを踏まえ、前半を大洞 B1 期～大洞 C1 期、後半を大洞 C2 期～大洞 A' 期とおいた(図 15)。

基本的には岩版・土版と同様、各項目ごとの絶対頻度と相対頻度をとった。異なる点は、岩版・土版が6型式に分類されているのに対し、土偶は上記の理由によって前半・後半に大きく2分するにとどめたことである。

3-3 統計法の詳細

統計処理に使用したソフトは SYSTAT8.0 である。各類ごとの類似関係を図示するために、各項目ごとの相対頻度に基づき、Q モード交換によるクラスター分析をおこなった。その際、類似度あるいは非類似度の算出方法には、ピアソンの距離を、二乗せずに用いた。また、クラ

スタリングの方法には、単連結クラスター化法(最近隣接クラスター化法)を用いた。

4. 結果と考察

4-1 岩版・土版について

全体を概観してまず目に付くのは、第1類の出土数の少なさと、高い齋一性である(図2～図12)。この齋一性はほぼすべての項目でみられる。第2類以降出現する岩版・土版の出土数の多さ、種類の豊富さとは対照的である。第1類と第2類の間には大きな変化があったことが判る。さらに、第2, 3, 4類と第5, 6類の間にも変化が見られる。岩版から土版へと材質が移行すること、北から南へと主生産地が移行することは従来より指摘されてきた。本集計結果では、これらの移行に関しては第4類と第5類の間が画期であり、この時点から岩版から土版へ、馬淵川流域・岩木川流域から北上川流域へと移行していくことが読み取れる(図2, 図3)。変化は材質・生産地域だけでなく、文様にも現れている。第2・3・4類ではほとんど見られなかった両面の正中線が、第5類及び第6類では6割・7割と大きな割合を占めるようになる(図11)。また、第2・3・4類に見られていた顔面表現は、第5・6類ではほとんど見られなくなる(図6～図8)。

身体的表現に注目した場合の、第1類と第2類との違いについて述べる。眼表現・口表現に関しては、上底と下底が揃っているものについて集計した。すなわち完形、ほぼ完形、破損品だが全体が推測可能なもの、第1類は計6点、第2類は計51点である。へそ孔についても、同様に上底と下底が揃っているものについてのみ集計したが、第2類の総数が眼・口表現の場合と異なり45点となっているのは、古い拓本等でこれの有無が判断できなかったため除いたものが6点あったためである。なお、2つの貫通孔を持つものは、機能的な意味の違いも加わってくるので、ここでの眼表現としての考察には含めていない。口表現においても、同様の

図2 河川域

図3 材質

図4 技法

図 5 形

図 6 眼状表現

図 7 上端中央の半孔
(口状表現)

図 8 正中線下端の半孔（へそ的半孔）

図 9 側溝

図 10 正中線に沿った対弧文

図 11 正中線

理由により貫通孔のものは除き半孔のみを考察している。

眼表現については、第1類は、計6点すべてがなんら眼表現らしきものを持たない。これに対し、第2類では計51点のうち、楕円形・遮光器眼表現を持つもの18点＝35.2%，眼を左右対称の2条の沈線で表現したもの6点を含めると、24点＝47.1%を占める（図6）。楕円形眼・遮光器眼表現を持つものだけでも3割以上、沈線の眼表現も含めると約半数に及ぶ。

上端中央の半孔（口表現）については、第1類は、形6点すべてがなんら半孔らしきものを持たない。第2類では、計51点のうち46点＝90.2%が上端中央の半孔をもつ（図7）。なお、これを口表現とする理由は、上端中央の半孔46点中、上記眼表現に挟まれて存在するものが24点＝52.2%を占めるからである。

片面長軸方向の正中線については、第2類の岩版・土版で、完形品、ほぼ完形品、破損品だが上底と下底が確認可能なもの、破損品だが裏表の正中線の有無が確認可能なもの計85点のうち、片面長軸方向に正中線を持つものが64点＝75.3%である（図11）。岩版・土版の正中線を土偶における正中線と同一視していいのか、つまり岩版・土版の正中線は単なる文様なのか身体表現なのかという問題については、第2類を取

り上げて考察すると次のようになる。1) 眼表現に伴って出現する割合が、51点中21点＝41.2%，正中線「有り」のうちでは42点中21点＝50.0%を占める。2) 口表現に伴って出現する割合が、51点中40点＝78.4%，正中線「有り」のうちでは42点中40点＝95.2%を占める。3) 眼表現または口表現に伴うときは、必ず同じ面に引かれている。4) 短軸方向に引かれているものは一点も無い。すなわち、必ず長軸方向に引かれている。5) 土偶の正中線と同様に、下端を半孔で留めているもの（へそ半孔）が、45点中15点＝33.3%，正中線「有り」のうちでは36点中15点＝41.7%を占める。6) 裏面の文様でも土偶の背中と共通していること（詳しくは「4-3 第2類・第3類の岩版・土版と、土偶との裏表の文様の類似」で後述）が認められる。以上1)～6)の理由から、岩版・土版における正中線は土偶における正中線と同一視して差し支えないと思われる。

このように、第1類と第2類には身体的表現に関して大きな違いがある。第1類には眼表現も正中線も全くみられない。これに対して、第2類においては、眼表現と正中線の双方、またはどちらか一方を持つ岩版・土版の割合が多くを占める。それは、一部の流行として済ませるには大きすぎる値である。やはり第2類におい

図 12 両面差違

ては、これら身体的な表現を持つものが本来的なものとするのが自然である。

これらの結果から、第1類と第2類の間に、また第4類と第5類との間にそれぞれ画期があるので、全体として大きく三つに分けられる、すなわち、岩版・土版はI: 第1類, II: 第2・3・4類, III: 第5・6類という3型式に大別できた。さらにII期のものは、土偶と共通する身体表現を持つということが読み取れた。以上述べたような各類の相互関係をわかりやすく図示するため、Qモード変換を用い、各項目ごとの相対頻度にもとづき、ピアソンの距離を求めクラスターを描いた(図13)。使用した項目は、河川域・材質・技法・形・眼状表現・上端中央の半孔・表正中線・正中線下端の半孔・裏正中線・側溝・正中線に沿った対弧文の、計11項目である。この結果、岩版・土版はI: 第1類, II: 第2・3・4類, III: 第5・6類の3つのグループに大別された。第1類が最も乖離し、第2類と第

3類が、また第5類と第6類が、互いに近い。これはこれまで記述してきた結果と一致する。しかも、ここでは相対頻度をとっているので、出土数の違いは反映されていない。出土数の少なさも考え合わせるならば、岩版・土版全体の中でも第1類が乖離した存在だということは明らかであると考ええる。

4-2 土偶について

4-2-1 土偶の正中線について

土偶の身体表現の特徴としては乳房・正中線・張り出した腹部などが従来より指摘されてきた。本論文でもその前提を受け、岩版・土版の調査においても、身体表現としての正中線に注目しているわけである。しかし、亀ヶ岡文化期の土偶について、正中線の有無に関する統計は取られていない。そこで、330点について、正中線の有無を調べた。その結果、正中線をまったく持たないものは78点=24%、腹側だけに正中線を持つものは244点=74%、腹・背

図 13 11項目に基づいたクラスター図

図 14 土偶の情報を加え、両面差違についてののみしたもの

両側に持つものは 8 点 = 2.4% であった。以上の結果より、亀ヶ岡文化期において、土偶は、一般的に正中線をもつものが多いと言える。そして、その場合はあくまでも片面（表面）であり、両面に入ることは稀である。

4-2-2 土偶の両面差違について

4-2-1 で、亀ヶ岡文化期の土偶は片面に正中線を持つものが 7 割以上を占めることがわかった。次に、さきに岩版・土版で用いた分類を同じく土偶にも用い、土偶の両面の差違を集計し

た。使用した資料は 4-2-1 で用いたもののうち、裏面の文様が確認できたもの計 307 点である。結果、土偶の背面の文様は、2: 横位の入組文 44 点と 3: 縦位の入組文 27 点をあわせて 71 点 = 23.1% と、入組文が全体のなかでは高い割合を占めることがわかった。

4-3 岩版・土版と土偶の胴体との、表裏の類似

前章で示された、土偶が片面（表面）に正中線を持ち裏面に入組文が比較的多いという傾向は、第 2・3 類の岩版・土版でも同様である。無文や一樣な文様だけであったならば、他の遺物にもありえるので、岩版・土版と土偶とがことさら共通すると言い切るのは難しいかもしれない。しかし、表の正中線・裏の入組文という特殊な組み合わせがそのまま共通しているのは、やはり互いに意識的な関連があると思われる。そこで、両面の差違のみに絞った場合の岩版・土版と土偶の関連をみるため、両面差違の項目に編年可能な土偶 189 点の情報を新たに加え、クラスターにかけた（図 14）。結果として、前半期の土偶は 3 類の岩版・土版にもっとも近く、次いで 2 類に近かった。それに対し後半期の土偶はどの岩版・土版と比較しても、互いに非常に近いとはいいがたいことが示された。先述した I, II, III の 3 型式の質的な違い—土偶との関連において—が、ここでも端的に示されている。表面の正中線と裏面の文様において、I は土偶と関連無し、II は土偶と関連有り、III は土偶と関連無しということがいえる。

なお、岩木川流域の板状土偶について付記する。岩版・土版と共通する文様、すなわち正中線に沿った対弧文・正中線をはさんでの S 字文や C 字文・正中線の両端を半孔で留める表現等を持った板状土偶が岩木川流域に限って複数出土する。岩木川流域では、数こそそれほど多くないものの、土偶が岩版・土版に与えた影響が特に強く示唆されている。

4-4 全体の考察

天羽が岩版・土版と土偶との関係を否定した根拠は、以下のようなものであった。

図 15 岩版・土版・土偶図

1. 初現形態である第1類は形態的に何も土偶との類似を持たない
2. 人面付きのものは第2類になってあらわれる
3. その人面付きのものは例外として取り扱わなければならない

しかし、第1類が岩版・土版という形式の初現形態であるとしても、その意味内容が一貫して継承されるとは限らず、初現であることをもって全体を判断することはできない。たしかに、第1類には形態的にも文様のにも身体表現は全くみられないが、第2類では、土偶に近似した身体表現が、この型式における本質的なものであった。

本研究の結論は、鳥居龍蔵、中谷治宇二郎らの「岩版・土版と土偶は、互いに連続するものではなくあくまで別形式であるが、身体表現という点では共通している」という主張に一見近いものとなったが、資料その他の論拠は大きく異っており、また、今回の主張はあくまでも第2・3類の岩版・土版は土偶と関係があるというものである。岩版・土版は第2類、第3類において、土偶の身体表現の一部を主体的に借り受ける。それは一部の岩版・土版に見られる流行ではなく、あくまで本質的な変化であり、前段階とは明確な一線を画されるべきものであった。岩版・土版の変化が一貫したものでないとすれば、連続性ごとに区切って考えることが重要になってくるだろう。

5. まとめ

縄文晩期亀ヶ岡文化期の岩版・土版の6型式は、大きくI:1類、II:2・3・4類、III:5・6類の3型式に大別される。従来の6型式が文様にに基づく細別であるのに対し、ここでの3型式は、それら6型式を材質・出土地域等、総合的な質の違いに基づいてまとめた大別である。そして大別型式IIは土偶との関連が示された。現在までの研究結果に、以上の本考察での結果を加え、新たにまとめると以下の通りである。

I: 第1類

土偶とは形式的に無関係である。必ず岩版で制作され、主な生産地は馬淵川流域、主な生産時期は大洞B期である。

表裏の彫りの深さを違えている以外は、特に表裏の区別はない。馬淵川流域では、玉抱き三叉文が規則的に施され、全体の形状は隅丸方形である。岩木川流域および米代川流域では、玉抱三叉文は不規則に施され、形状も隅丸台形である。角張った形のみであり、楕円形はない。

II: 第2・3・4類

土偶とも共通する、胴体を中心とする身体表現の一種が存在する。本来は石製品であり、主な生産地は岩木川流域および馬淵川流域、主な生産時期は大洞BC期から大洞C1期にかけてである。

表裏は、正中線の有無によって明確に区別されている。眼表現・口表現を伴うものが多く、特に口表現すなわち上端中央の半孔はほとんどのものに見られる。岩木川・米代川流域は楕円・たまご形などの丸みがかかった形が多く、馬淵川流域は隅丸方形の角張った形が多い。

特に岩木川流域は土偶との関連が強い。下端中央の半孔および裏面横位の入組文は、岩木川流域では殆どに施されるが、馬淵川流域では省略される傾向にある。筆者は、第2類にはじまる人体意匠としての岩版・土版は、馬淵川流域よりもむしろ岩木川流域にその原形を求められるのではないかと考えている。

III: 第5・6類

IIの表面的な影響を受けつつも、身体表現としての意味を失った型式である。本来は土製品であり、主な生産地は北上川流域、主な生産時期は大洞A期である。

正中線や楕円形・隅丸方形など、IIの表面的な影響を受けつつも、表裏の区別が無く、眼が消え、半孔も不安定で、側溝が頻繁に見られるなど、身体表現としての意味を失った型式である。しかしながら、岩木川流域だけは、表裏の区別がみられ、身体としての概念を最後まで引

きずっていたのではないかと考えられる。

6. 謝辞

岩版・土版資料を収集するにあたり、以下の博物館、埋蔵文化財センター、教育委員会等の方々には大変お世話になりました。岩手県北上市立埋蔵文化財センター稲野裕介先生、稲野彰子先生、秋田県立博物館庄内昭男先生、秋田県埋蔵文化財センター児玉準先生、青森県八戸市博物館小笠原善範先生、青森県埋蔵文化財調査センター成田滋彦先生、青森県田子町立図書館佐藤大先生、青森県田子町公民館館長袴田實先生、岩手県一戸町教育委員会高田和徳先生、弘前大学人文学部藤沼邦彦先生、青森県階上町教育委員会森淳先生、岩手県立博物館日下和寿先生、青森県八戸市縄文学習館小林和彦先生、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター松尾芳幸先生、青森県立郷土館鈴木克彦先生、岩淵宏子さん、青森県板柳町教育委員会川口みち子先生、青森県弘前市教育委員会成田正彦先生、青森県南郷村歴史民俗資料館上村四郎先生、サントリー美術館、東京国立博物館の皆様、本当にどうもありがとうございました。また、東京大学文学部考古学教室安斎正人先生、大塚達朗先生、田口みどりさん、東京大学総合研究博物館諏訪元先生、高橋昌子さん、研究室のみなさん、常に親身なご助言を下さった日本女子大学の磯前順一先生、そして最後に、常に励ましご指導くださった、指導教官の木村賛先生に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 天羽利夫 (1965) 亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究, 史学, **37-4**, 77-96 (441-460).
- 池上啓介 (1933) 土版岩版の研究—特に土版岩版形式及び分布状態に就いて, 上代文化, **10**, 42-54.
- 池上啓介 (1935) 土版岩版発見地名, 史前学雑誌, **8-5**, 31-36.
- 磯前順一 (1994) II. 土偶象徴論, 土偶と仮面・縄文時代の宗教構造, 校倉書房, 179-193.
- 稲野彰子 (1983a) 岩版・土版出土遺跡—東北・関東地方一, 考古遺跡遺物地名表, 柏書房, 408-414.
- 稲野彰子 (1983b) 岩版—研究動向, 縄文文化の研究, **9**, 102-113.
- 稲野彰子 (1990) 土偶と岩版・土版, 季刊考古学, **30**, 75-77.
- E.S. Morse (1879) Shell Mounds of Omori (1967 年復刻版), 中央公論美術出版・大森貝塚保存会, 31-33.
- 大野延太郎 (1897) 土版ト土偶ノ関係, 東京人類学雑誌, **12-131**, 201-204.
- 大野延太郎 (1898) 岩盤も土偶に関係あり, 東京人類学雑誌, **13-144**, 235-236.
- 大野延太郎 (1901) 石器時代土偶系統品と模様の変化に就て, 東京人類学雑誌, **16-184**, 411-413.
- 大野雲外 (1918) 土版・岩版の形式分類, 人性, **14-9**, 489-496.
- 小林達雄 (1967) 縄文晩期における<土版・岩版>研究の前提, 物質文化, **10**, 1-8.
- 佐藤傳蔵 (1896) 陸奥国亀ヶ岡第二回発掘報告, 東京人類学雑誌, **124**, 389-412.
- 佐藤傳蔵 (1897) 陸奥国床舞村発見の土偶に就いて, 東京人類学雑誌, **13-142**, 149-159.
- 杉山寿栄男 (1923) 原始文様集, **39**, 44.
- 杉山寿栄男 (1928) 日本原始工芸, 図版解説, 301-309.
- 坪井正五郎 (1899) コロボックルの宗教的遺物, 東洋学芸雑誌, **16-209** (『日本考古学選集』第2巻, 170-175).
- 土偶とその情報研究会 (1996) 東北・北海道の土偶 II—亀ヶ岡文化の土偶一, **23-148**, 195-238.
- 鳥居龍蔵 (1922) 日本石器時代民衆の女神信仰, 東京人類学雑誌, **37-11**, 371-383.
- 芹沢長助 (1960) 岩版と土版, 石器時代の日本, 築地書館, 162-164.
- 中谷治宇二郎 (1929) 日本石器時代提要.
- 中谷治宇二郎 (1930) 日本の石器時代の土偶研究序説, **81**.
- 永峯光一 (1977) 6 土版・岩版, 日本原始美術体系 3—土偶埴輪, 講談社, 170-171.
- 野口義麿 (1964) 土版, 日本原始美術 2, 講談社, 134.
- 村越 潔 (1983) 考古学ライブラリー 18 亀ヶ岡式土器, 72-73.

付録: 岩版・土版資料リスト

河川域	遺跡	個数	所蔵場所または出典
<岩木川流域>	亀ヶ岡	10	杉山寿栄男1928『日本原始工芸』
			青森県立郷土館
			池上啓介1936「土版岩版発見地名」『史前学雑誌』8-5
			東京国立博物館
			東京大学総合研究博物館
			東北大学文学部1982『考古学資料図録』
	床舞	2	東京国立博物館
			杉山寿栄男1928『日本原始工芸』
	今津	1	青森県立郷土館
	平賀町	1	サントリー美術館1969『土偶と土面』
	程の森	1	甲野勇1964『日本原始美術 2 土偶・装身具』講談社
	「腰内」	1	東北大学文学部1982『考古学資料図録』
	高杉	1	東京国立博物館
	常盤坂	1	東京大学総合研究博物館
	源常平	1	青森県教育委員会1978『源常平遺跡発掘調査報告書』
	湯の沢	1	村越潔他「岩木山」,1968,岩木山刊行会
	鯉ヶ沢	1	鈴木克彦1984「青森県鯉ヶ沢町出土の大型岩版」『考古風土記』9
	大森勝山	1	弘前市教育委員会
	薬師1号	1	弘前市教育委員会
	不明	2	弘前市教育委員会
	土井1号	6	青森県板柳町教育委員会
	砂沢	3	サントリー美術館1969『土偶と土面』
			岡田康博1981「弘前市砂沢遺跡出土の土版」『考古風土記』6
<陸奥湾沿岸>	玉清水	5	サントリー美術館1969『土偶と土面』
			青森県立郷土館
	沢山	3	青森県立郷土館
	長森	3	青森県立郷土館
	平内町	1	青森県立郷土館
<馬淵川流域>	三内	1	青森県立郷土館
	八幡	9	八戸市博物館
	是川中居	19	八戸市是川縄文館
			青森県立郷土館
	滝端	1	青森県階上町教育委員会
	勘左衛門山	1	稲野彰子1983「岩版」『縄文文化の研究 9』雄山閣
	寺下	1	稲野彰子1983「岩版」『縄文文化の研究 9』雄山閣
	野面平	5	東京国立博物館
			青森県立郷土館
			田子公民館
			稲野彰子1983「岩版」『縄文文化の研究 9』雄山閣
	田子町	1	田子公民館
	石亀	2	渡辺誠他1997『青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』(古代学協会)
	名川	5	稲野彰子1983「岩版」『縄文文化の研究 9』雄山閣
			サントリー美術館1969『土偶と土面』
			青森県立郷土館
	泉山	5	青森県埋蔵文化財センター

付録:岩版・土版資料リスト

河川域	遺跡	個数	所蔵場所または出典
	明戸	3	ト和田市教育委員会1983『明戸遺跡発掘調査報告書』
	虚空蔵	2	ト和田市教育委員会1983『明戸遺跡発掘調査報告書』
	荒谷	7	南郷村歴史民族資料館
	山井	5	岩手県一戸町教育委員会
	蔭前	5	サントリー美術館1969『土偶と土面』
	雨滝	9	サントリー美術館1969『土偶と土面』 明治大学考古学研究室 稲野彰子1983「岩版」『縄文文化の研究 9』雄山閣 芹沢長介1960『石器時代の日本』築地書館 八幡一郎1959『世界考古学大系』日本1 平凡社
	駒板	3	岩手県埋蔵文化財センター
	大日向Ⅱ	5	岩手県埋蔵文化財センター
	軽米	4	東京国立博物館 サントリー美術館1969『土偶と土面』 青森県立郷土館
	豊岡	3	岩手県立博物館
	大芦Ⅰ	1	岩手県埋蔵文化財センター
	越田	1	稲野彰子1983「岩版」『縄文文化の研究 9』雄山閣
<北上川流域>	手代森	13	岩手県埋蔵文化財センター
	しだ内	1	岩手県埋蔵文化財センター
	繁	2	岩手県埋蔵文化財センター
	盛岡市付近	2	岩手県1961『岩手県史』1-上古篇・上代篇
	黒内	1	岩手県埋蔵文化財センター
	和田前	1	北上市立博物館
	九年橋	26	北上市立埋蔵文化財センター
	前沢町川岸場	2	岩手県立博物館1984『縄文の風景』
	白浜貝塚	1	岩手県立博物館1984『縄文の風景』
	牡丹畑	2	北上市1968『北上市史』1-原始・古代(1)
	鶴木	4	水沢市教育委員会1965『水沢の原始・古代遺跡-外浦・中島・鶴木三遺跡調査報告書』
	川向Ⅲ	1	岩手県埋蔵文化財センター
	和賀・木村	1	稲野彰子1983「岩版」『縄文文化の研究 9』雄山閣
	安堵屋敷	9	岩手県埋蔵文化財センター1984『安堵屋敷発掘調査報告書』
<米代川流域>	藤株	3	秋田県立博物館 秋田県埋蔵文化財センター1981『藤株遺跡発掘調査報告書』
	矢石館	4	サントリー美術館1969『土偶と土面』 秋田県埋蔵文化財センター
	麻生	6	東京大学総合研究博物館 大野延太郎1898「岩盤も土偶に関係あり」『東京人類学雑誌』13-144 東京国立博物館 東北大学文学部1982『考古学資料図録』 杉山寿榮男1928『日本原始工芸』
	寺の沢	1	サントリー美術館1969『土偶と土面』
	壇の上	1	東北大学文学部1982『考古学資料図録』
	白坂	12	秋田県埋蔵文化財センター

付録: 岩版・土版資料リスト

河川域	遺跡	個数	所蔵場所または出典
<雄物川流域>	秋田市上北手地方	1	秋田県立博物館
	石名館	4	秋田県立博物館
			高橋直一1933「羽後石名館発見の石器時代遺物」『考古学雑誌』52
			東京国立博物館
	虫内 I	5	秋田県埋蔵文化財センター
	戸平川	1	秋田県埋蔵文化財センター
	横手・半谷地	2	江坂輝弥1960『土偶』校倉書房
			大野雲外1918「土版・岩版の形式分類」『人性』14-9
	由利・小川	2	杉山寿栄男1923『原始文様集』
	平鹿・旭村	2	杉山寿栄男1923『原始文様集』
	鏡田	12	秋田県湯沢市教育委員会